石斧の考古学

まほろん館長　**石川 日出志**

【内容のあらまし】　私たちは，斧と言えば鉄斧を思い浮かべますし，斧（おの）という言葉も金属製を念頭に置いているようです。しかし石斧は，文字も金属器も登場するより前の先史時代の資料であり，モノ自体をどう認識するかから石斧の研究は始まりました。そうした研究の初期の様子や，日本列島における磨製石斧の登場の不思議，磨製石斧をどのように観察するのか，どのように柄に装着して用いたのか，などについてご紹介します。

０．宿題の回答

・前回講演で，日本の古代のロクロ利用土器づくりでは，ロクロ右回転が圧倒的多数だと話しました．講演後に会場から「朝鮮半島などでは左回転が多いと訊いたことがあるがどうか」と質問があり，宿題としましたので，回答します．

・漢代楽浪郡の土器を詳細に観察した鄭仁盛氏が，左回転が多い（44 例中 36 例）と報告していました（鄭仁盛 2003「楽浪円筒形土器の性格」『東京大学考古学研究室紀要』第 18 号，pp.137-162）．

１．石斧をどう考えるか

（１）斧（おの）に関する漢字と倭（和）語　【１-上】

①．漢字（斤・斧・鉞）：　甲骨文字に由来＝青銅製の斧に始まる

②．倭語（おの・ちょうな・まさかり・よき）：　鉄製の斧を呼ぶ語

→　金属器が登場する以前の石斧はこれらの語で表してよいのか？　正確には「斧形石器」だが，大枠として「斧（おの）」の語を用い、「石斧（いしおの・せきふ）」と呼ぶ．

（２）石斧の探求ー「雷斧」から石斧分類へー　【２】

①．江戸時代：木内石亭 1773・75『雲根志』，藤貞幹 1792-97 頃『集古図』に「**雷斧**」

・本草・博物学的関心から石器類の収集・注目．藤貞幹『集古図』では，斧と認識して刃部の形状を平面・側面図で示すように，人為物を視野に入れながらも，石器時代という認識が芽生えていないため，「雷斧」と呼ぶ．

②．明治期：科学的方法による石器研究が始まる．

・「科学的」＝形態・大きさ・材質など基準を明示して分類・記述して体系化を図る．

a）**神田孝平 1884**『日本大古石器考 Notes on Ancient Stone Implements, &c., of Japan』

・「石器世期」（石器時代）と認識．形状（楔や鑿）・大きさ・素材をもとに分類．

→　ただし「雷斧・雷槌（つち）」と呼び，「闘争または武威を示す」器具とする点は，江戸時代以来の認識から抜け出ていない．

b）**大野雲外（延太郎）1906**「石斧の形式に就て」『東京人類学会雑誌』240

・「磨製石斧」を，平面形，（縦・横）断面形，刃部形態（蛤刃・片刃）から 7 分類し，石材と分布との相関を読み解く．

→　鉄斧類と対比して理解するのではなく，石斧をそれ自体の特徴で分類し，その分類単位ごとに分析を進める方法が確立．石器分類学の始まりとして重要．

③．２０世紀初め：縄文式土器と弥生式土器の区分が明確になると，弥生式土器にも石器が伴い，それが大陸に類例があると分かる．　【３】

a）弥生式土器にも石器が伴う：　鍵谷徳三郎 1908「尾張熱田高倉貝塚実査」『考古界』7-2

b）鳥居龍蔵 1917「畿内の石器時代」『人類学雑誌』32-9：　弥生式土器には，抉入石斧（現在の抉入柱状片刃石斧）など，縄文式の石器と異なる特徴があり，その類例は大陸にある．弥生時代土器の使用者は大陸に由来する**「固有日本人」**と主張.

→　縄文時代人と弥生時代人が異なる人間集団とみる見解で，現在まで議論となる課題を提示した.

２．世界の石器時代史の中の磨製石斧

（１）世界の石器発達史：　旧石器時代に磨製石斧はない.

①．**旧石器時代：**　打ち割る原石の芯を用いる石核石器から，原石からいったん石核をつくり，そこから剝ぎ落とした石片（剝片）を素材として石器をつくる剝片石器へ．石核石器に **handaxe（握斧）があるが石斧ではない**（万能石器）.

②．**新石器時代＝磨製石器が登場した時代.**

・J.ラボック（Lubbock）1865『先史時代 Prehistoric Times』による新石器時代の定義.

・東アジアの実例：　中国河姆渡遺跡（BC5000 頃）：石器時代に枘穴結合法が.【１-下】

（２）日本列島の旧石器時代には磨製石斧がある！　【５・６】

①．**群馬県岩宿遺跡 1949-50 年調査：　【５】**

日本で最初の縄文時代以前の人類文化を実証．旧石器時代と主張するも，H.Breuil ブリュイは磨製石器があるから新石器時代だと否定.

・杉原荘介 1956『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部

・安蒜政雄 1975「『岩宿報告』についての海外からの論評－ブリュイ氏とボルド氏の考え－」『駿台史学』36

②．現在では，**日本列島の後期旧石器時代初めに多数の発見例**がある.【６】

→　そもそも後期旧石器時代は多数の骨角器に研磨技術を駆使することに注目すべき.

３．磨製石斧を読む

（１）縦斧・横斧とその判別　【７】

①．**縦斧と横斧：　【７-Ａ】**

・刃（刃線）が柄とほぼ平行する縦斧，ほぼ直交する横斧.

・基本的に縦斧は伐採斧，横斧は加工斧だが，絶対的ではない.

②．**両刃（蛤刃）と片刃：　【７-Ａ～Ｃ】**

・両刃＝石斧の刃の両面がほぼ左右対称のもの．そのうち刃の丸みが強いものが蛤刃.）一方，刃の両面が左右非対称なのが片刃．蛤刃・片刃は弥生時代に明瞭.

・片刃のほとんどは横斧だが，両刃は縦斧・横斧ともある．大きさも関係する.

③．**判別法：　【７-Ｂ～Ｄ】**

a）柄に斧が装着されて出土：　ほとんどが伐採用の縦斧．柄孔に装着されるため.

b）石斧に着柄の痕跡が残る：　Ｃは，火災による煤で，片面に紐かけ痕，もう片面に斧

台部に密着した痕跡が残り，横斧と分かる．

c）刃部の使用痕のよる：　縦斧は，使用による擦痕が，斧刃の両面にほぼ均等につくのに，横斧は刃が平坦な面に擦痕が顕著．

（２）**縄文草創期の神子柴型石斧：　【８】**

・日本列島では後期旧石器時代初めに多数見られた磨製石斧はいったん姿を消したのち，縄文時代草創期に再登場する．

・刃部周辺を研磨する丸のみ形の横斧．

（３）**縄文・弥生時代の磨製石斧の製作と使用：　【９】**

①．**製作過程：**

石核部素材：　原石→→→→→→→打ち欠き成形→敲打整形→研磨

剝片素材：　原石→剝片づくり→打ち欠き成形→敲打整形→研磨

・研磨は，石斧を右手で持って研ぐ例が多数．

②．**使用による石斧の破損**

・頭部側残存（＝刃部側欠損）と破損した刃部側

・刃部の破損　→　軽微であれば研磨し直して刃部を再生する．

（４）**着柄を考える**

①．**斧柄に石斧が遺存した実例　【７-Ｂ】**

・ほとんど縦斧（前掲）

②．**様々な斧柄と着柄法　【10】**

・縦斧と横斧：　柄孔に挿入するもの以外は紐巻きによる結縛が必須．

・紐巻きによる結縛の具体的方法は不明な点が多い　【７-Ｃ】

③．**民族資料の観察が重要　【11】**

・発掘資料では判断が難しい紐巻き結縛法の多彩な実例！

・モノ研究が盛んな日本考古学なのに，世界の民族資料への関心が不足と感じる．

④．では**こんな石斧（独鈷形両頭石斧）はどのように着柄したのでしょうか？　【12】**

・ヒント：　中央に鍔（つば）状の突起２条が一周し，その間は敲打痕のざらつきを表面に残してある．

４．石器の終焉―石斧から鉄斧へ―

（１）**利器の素材に基づく考古学の時代区分「石器時代→青銅器時代→鉄器時代」**

・C.J.トムセン(Chritian Jurgensen Thomsen)：1832『北欧古代学入門』で発表．

（２）しかし**日本列島では，弥生時代に，石器時代から鉄器時代へと移行（青銅器時代を欠く）**

・弥生前期末～中期初めに，中国・燕の鋳造鉄器が朝鮮半島経由でもたらされる．【13】しかし，鋳造鉄斧が破損してもつくり直す技術がなく，鉄斧片を研いで刃をつけた．

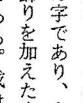
・後期には石製の利器はほとんど鉄器に置き換わる．東北地方でも弥生後期に石鏃などは残る（石斧はない）が古墳時代前期には石器はまったくなくなる．

〔参考文献〕

・佐原　真 1994『斧の文化史』UP 考古学選書 6，東京大学出版会

斤

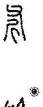
4 キン ておの・きる



象形 斧の形。「ちょうな」とよばれる手斧の形であろう。〔孟子、梁恵王、上〕に「斧斤、時を以て山林に入らば、材木勝げて用ふべからず」とあり、斧は斧鉞ともいう大きな斧、斤は〔説文〕一四上に「木を斫るなり」とあって手斧をいう。〔荘子、徐无鬼〕に、斤を運らして、婦人鼻頭の白土を削りおとしたという名人の話がみえ、「運斤、風を成す」という語が生れた。詩文に删正を加えることを、運斤という。

斧

8 フ おの・まさかり・きる



形声 声符は父。父は斧鉞をもつ形であるから、父の第一画がその象形、斧はその形声字である。〔説文〕一四上に「斫るなり」とあり、斧鉞は刑具に用い、また指揮をとるときの儀器で、父とはその儀器を執るものをいう。〔国語、周語〕に「斧鉞刀墨の刑」の語がある。もとより伐薪などにも用いるもので、〔孟子、梁恵王、上〕に「斧斤、時を以て山林に入る」の語がある。

戉

5 〔鉞〕 13 エツ（ヱツ） まさかり

象形 まさかりの形。〔説文〕一二下に「大斧なり」という。〔司馬法〕に「夏は玄戉を執り、殷は白戚を執り、周は左に黄戉を杖き、右に白旄を秉る」というが、それらは要するに王の指揮権を示す儀器である。儀器としては、刃部を下にして玉座の前におく。その字形が王の字であり、上部に玉飾りを加えたものが皇である。戉は鉞の初文。鉞はその形声の字である。図は近年殷墟の婦好墓より出土した鉞。中央の人面を両饕餮が襲う形で、この文様は辟邪の意をもつものであろうと思われる。下に婦好の名をしるす。同出の多数の精巧な青銅器にも、その名をしるしている。婦好は殷の武丁の正妃と考えられている人である。

婦好墓出土の銅鉞

白川静 1994『普及版字統』平凡社

おの【斧】名 木を切ったり割ったりするのに用いる道具。刃のある鉄片に木の柄をつけたもの。「一（斧）取りて〔万葉・三三二〕」「一丁」〔『一の柄（え）朽・つ』〔述異記〕（中国晋（シン）の王質の故事による）わずかの時と思った間に意外に長年月の経過したことをいう。多くは、事の面白さに時のたつのを忘れる意に用いる。「爛柯（ランカ）」「ふるさとは見しどともあらず斧の柄の朽ちし所ぞ恋しかりける〔古今・雑下〕」

ちょうな【手斧・手丁】〔鉏・新〕てうな（「てをの」の音転）斧（オノ）で荒削りした材木を平らにするための鍬（クワ）形の刃物。曲った柄の先に刃がつき、内に向けて使う。でおの。〔日ポ〕「一め【一目】手斧で削ったあと。

〔手斧〕

まさかり【真盛（り）】〔名・ナリ形動〕「まっさかり」に同じ。「顧眄之間、此には『見る一』に（摩沙可梨爾）と云ふ〔神代紀上〕」

よき【斧】斧（オノ）の小さいもの。手おの。〔新撰字鏡〕〔和名抄〕〔曾丹集〕

おの【〈斧】】名 刃のある厚い鉄片に柄をつけた、木を切るための道具。小形のまさかり。かぞえ方 挺

ちょうな【〈手〈斧】】名 大工道具の一つ。おのでけずったあとをたいらにするために使う、くわ形の刃物。▽「でおの」から変化した形。

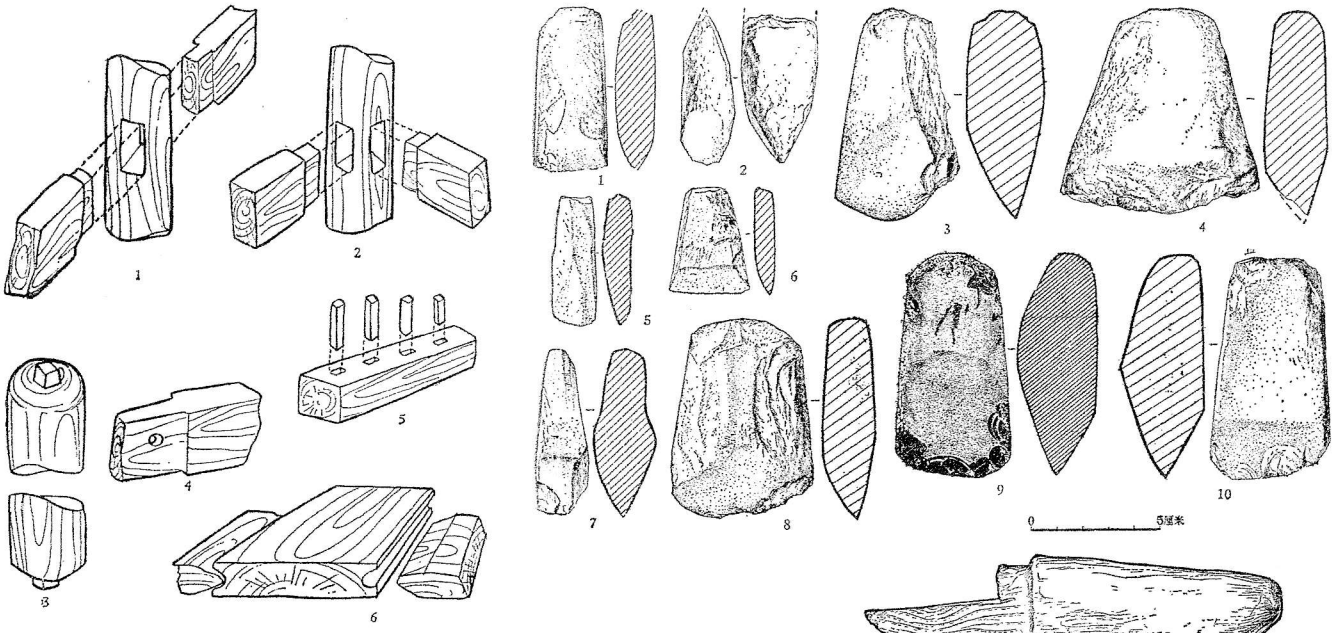
ちょうな

まさかり【〈鉞】】名 木を切るための、大形のおの。

山田俊雄ほか編 1995『新潮国語辞典第二版』新潮社

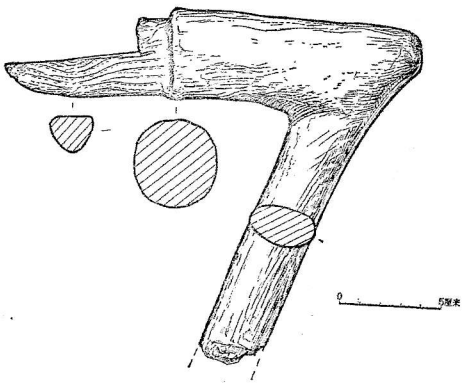
大野晋・田中章夫編 1995『角川必携国語辞典』角川学芸出版

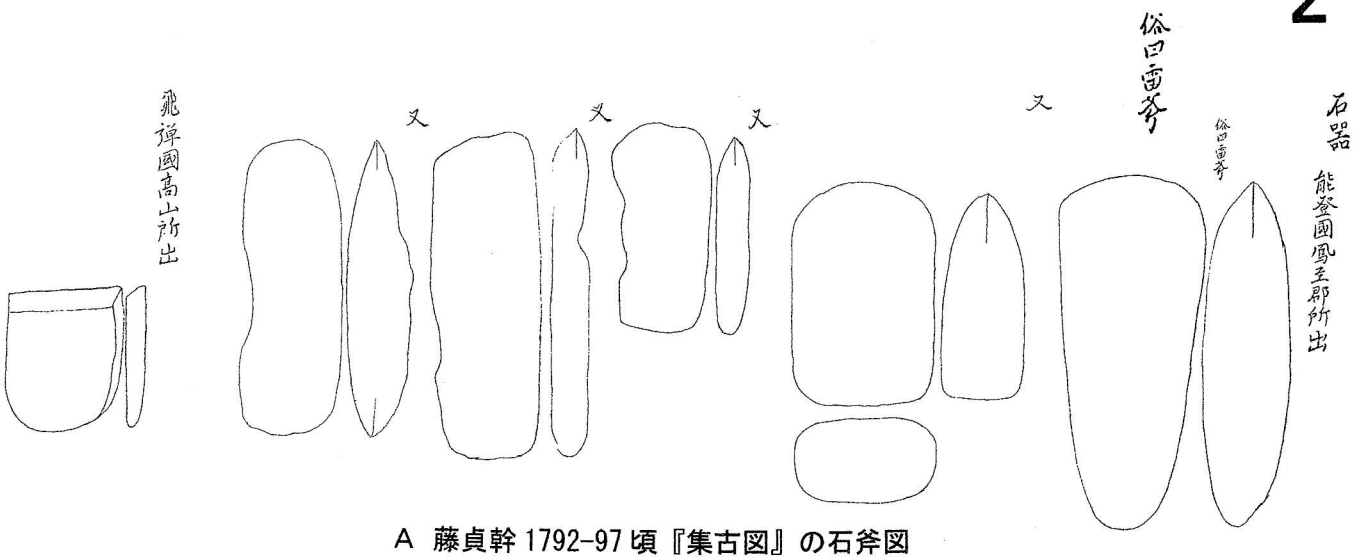
A 斧（おの）に関する漢字と倭（和）語



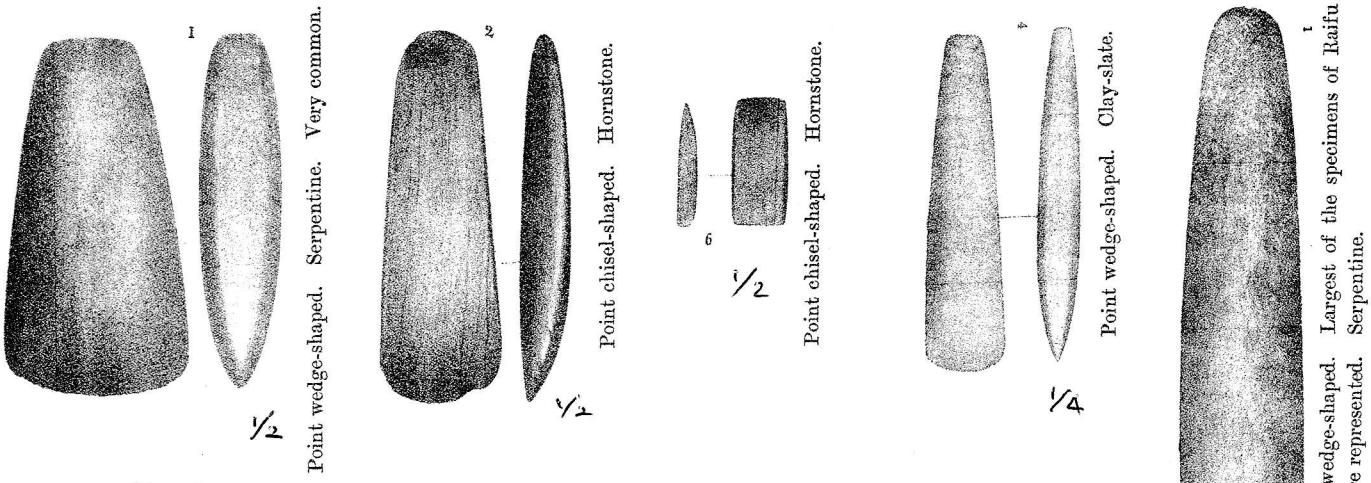
B 中国長江下流域の約 7000 年前の石斧と斧柄・枘穴結合

（浙江省河姆渡遺跡：『考古学報』1978-1）



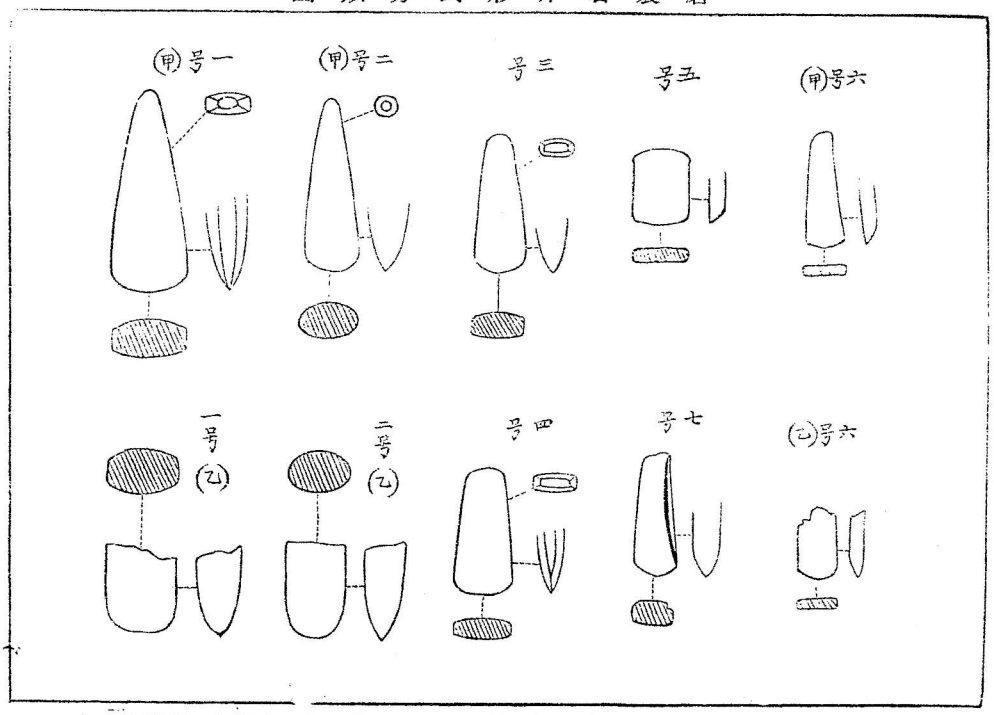


A 藤貞幹 1792-97 頃『集古図』の石斧図



B 神田孝平 1884『日本大古石器考
Notes on Ancient Stone Implements, &c., of Japan』

圖類分式形斧石製磨



明治三十九年三月十二日

C 大野雲外 1906「石斧の形式に就て」『東京人類学会雑誌』240

石斧をどう認識＝分類するか？

尾張熱田高倉貝塚實査

鍵谷德三郎

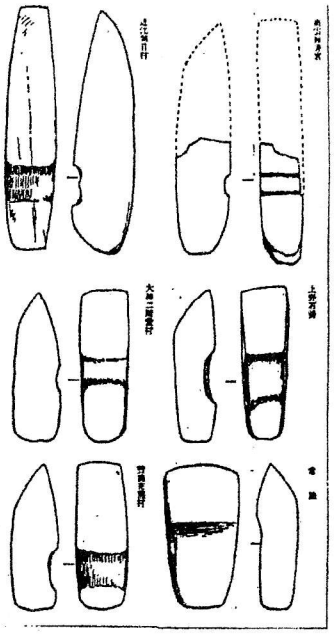
考古界第七編第二號

ロ、石器類

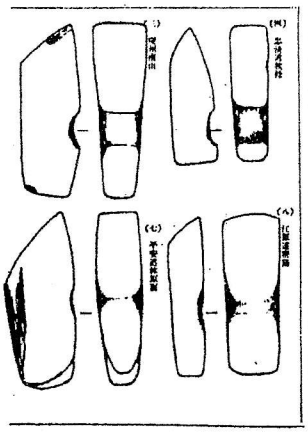
磨製石斧	完全五個	破片拾貳個
石鏃	完全壹個	
石槌？	完全四個	缺損壹個
凹石	完全六個	缺損貳個
圓板石？	壹個	
石鏃	貳個	

第三圖

弥生式土器に石器が伴う（鍵谷 1908）



第二十圖　內地發見扶入石斧集成圖



第二十一圖　朝鮮各地發見扶入石斧集成圖

弥生式に伴う「扶入石斧」が朝鮮半島にも（梅原末治 1922）

私は大和の有史以前の遺跡はアイヌの其れでなく、殆ど全く吾人祖先固有日本人（Japonaise proprement dite）の殘したものであるとすでに發表いたしましたが、さて其他の地方のものは如何と云ふに、是等もまた大和と同じく殆んど固有日本人祖先の有史以前の遺跡であつて、遺物の如きも大和の其れと大差は無い。（中略）

石庖丁も中々多い、之に比して石斧は極めて少ない、石庖丁は固有日本人石器時代遺跡に伴なふもので、這は單に畿內にとどまらず他でも左樣であります、加之、此處の石庖丁の形式は朝鮮、滿洲の物とよく似て居る、殊に朝鮮、滿洲の石器時代遺跡には石庖丁其作り掛の物、其破片は豐富である。

石斧は小數ながらも磨製が主で、之れに蛤刃と片刃との二種類がある、尙ほ一種特有な彎曲片刃の石斧がある、這は大和河內にもあれば、近江からも石劍（京都大學所藏）と共に出て居る、斯くの如き形式の石斧は朝鮮の石器時代に特有のもので、南部に於ては慶州附近が最も多い、是等は何等か互に關係がある樣に思はれます、（中略）

所謂彌生式土器の名稱ある固有日本人の物で、畿內地方は殆んどこの種のものである、而して土器の形式はすべて共通を有し、當時互に交通往來して居つた事が知れます、（中略）

是等の土器は朝鮮や滿洲、沿海州、東蒙古の石器時代の土器とよく類似して居つて、其形狀、紋樣、把手などは殆んど全く同じであります、是等の類似と云ふものは決して偶然の一致とは思はない、この間には面白い人種學上の謎が含まれて居ると思ひます。私は此の謎は畿內の固有日本人の遺跡遺物は東北方亞細亞大陸と深い關係が存在して居る事と考えます、這は單に土器の類似のみならず、石器の其れに於ても又同一の事實を示して居ります、私は日本の周圍の大陸や嶋嶼の石器時代遺物に注意し調査して居りますが、未だこの東北方亞細亞大陸の物ほどよく似たのを他で知る事は出來ません。而して斯くの如き固有日本人の遺跡はたゞに畿內ばかりで無く中國にも九州にも關東にも廣く存在して居りますから、是等の遺跡は先史考古學や人種學上から申せば、日本本島から壹岐、對島、朝鮮の多島海の諸島嶼を經過し大陸に連絡して居ると申してよろしい、私は彼等はもと大陸から移住して來たものであらうと考て居ります。（中略）

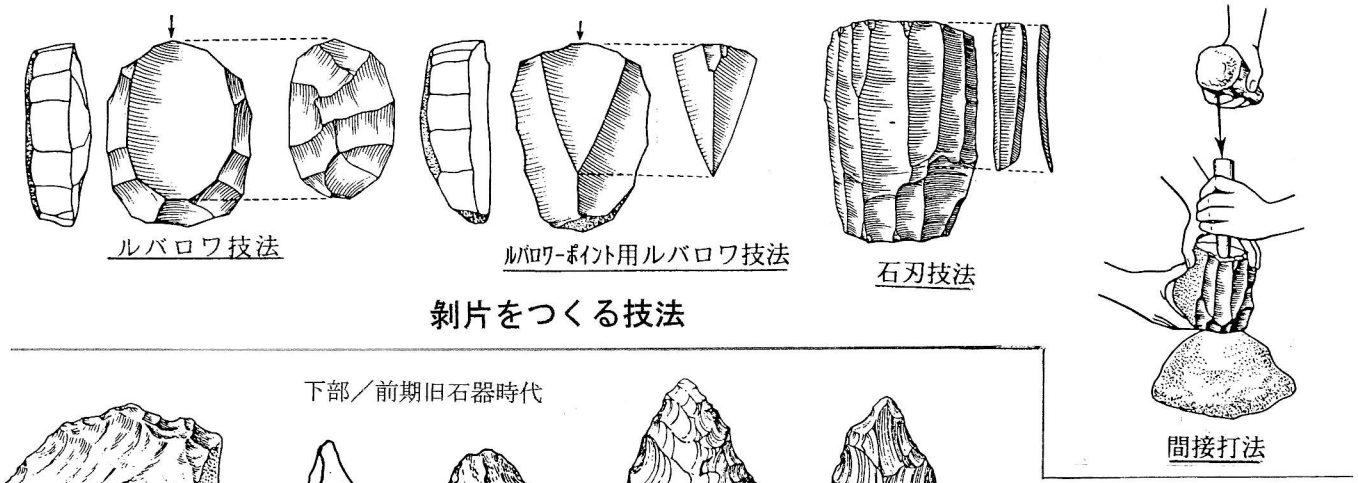
固有日本人は最も古い時、石器時代の時から畿內に住まつて居つた、其母の國は亞細亞大陸――朝鮮半島であつたであらう、その理由で私は古い古い昔は日本本島も朝鮮半島も人種學的に續いて居つたものと思ふ。彼の神話時代になつて、朝鮮半島との交通往來は有史以前石器時代からの引續きであります、されば畿內（中國、九州其他も）の石器時代の研究はどうしても朝鮮の石器時代の其れと比較せねばなりません、尙ほ併せて滿洲沿海州東蒙古のものとも。

日本と朝鮮（尙ほ滿洲人、ツングース、蒙古人等）との關係は人種學、言語學上等より見てもよく類似して居ります、この事に就てはすでに內外先輩の認ひる所でありますが、之に加ふるに更に考古學上の證明が出來ますから、一層この意見は堅固のものとなつて參りました。

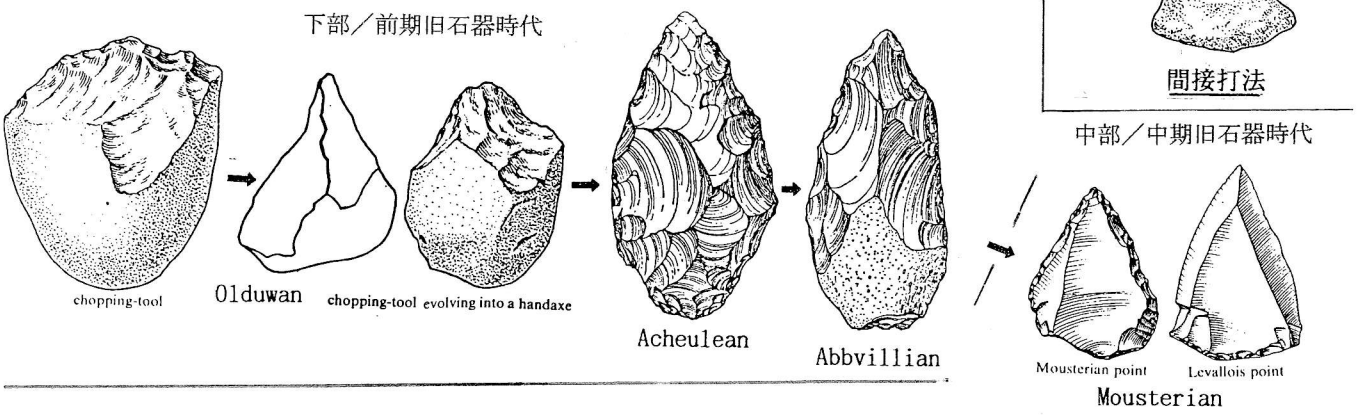
之れまで日鮮の關係は神話時代から說かれましたが、私は神話神代よりもずつと前の石器時代から始まつて居ると考えます、しかもこの關係は單に交通往來貿易等の其れでなく、寧ろ人種學的の關係を有して居ります。

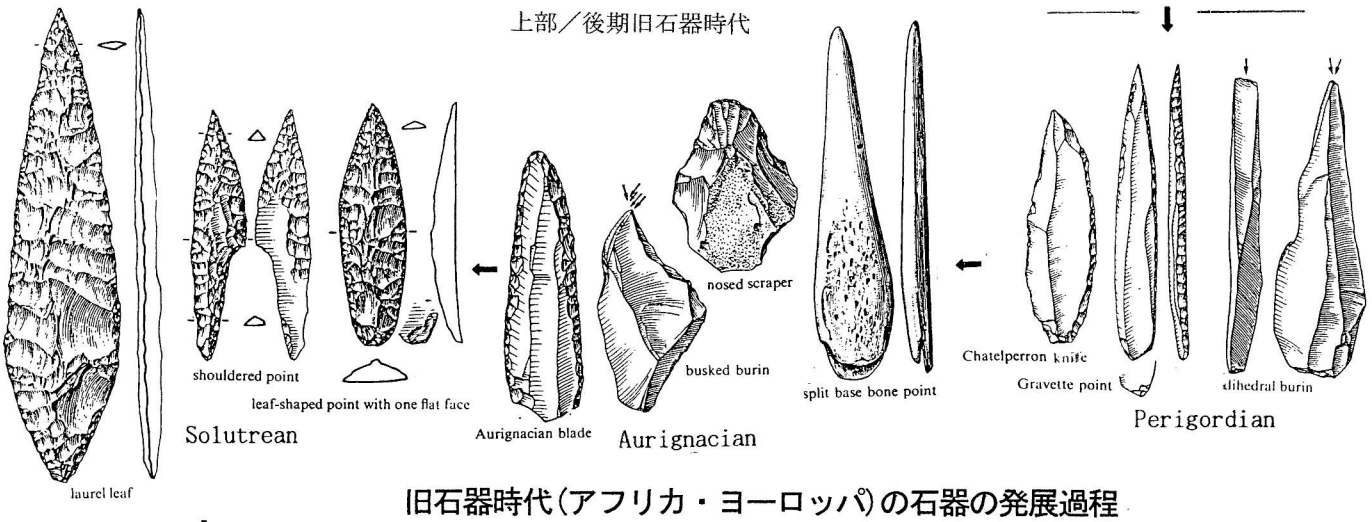
鳥居龍蔵の「固有日本人」說：鳥居龍蔵 1917「畿內の石器時代に就て」『人類学雜誌』32-9

石器の特徴から弥生式土器使用者＝渡来人說が主張される



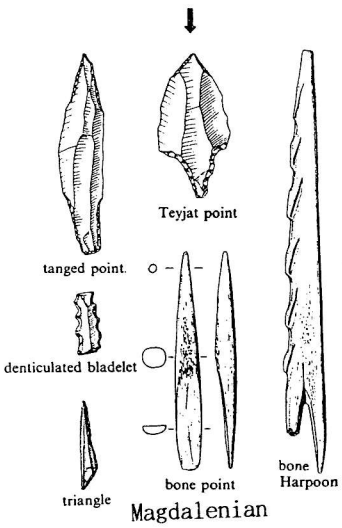
剝片をつくる技法





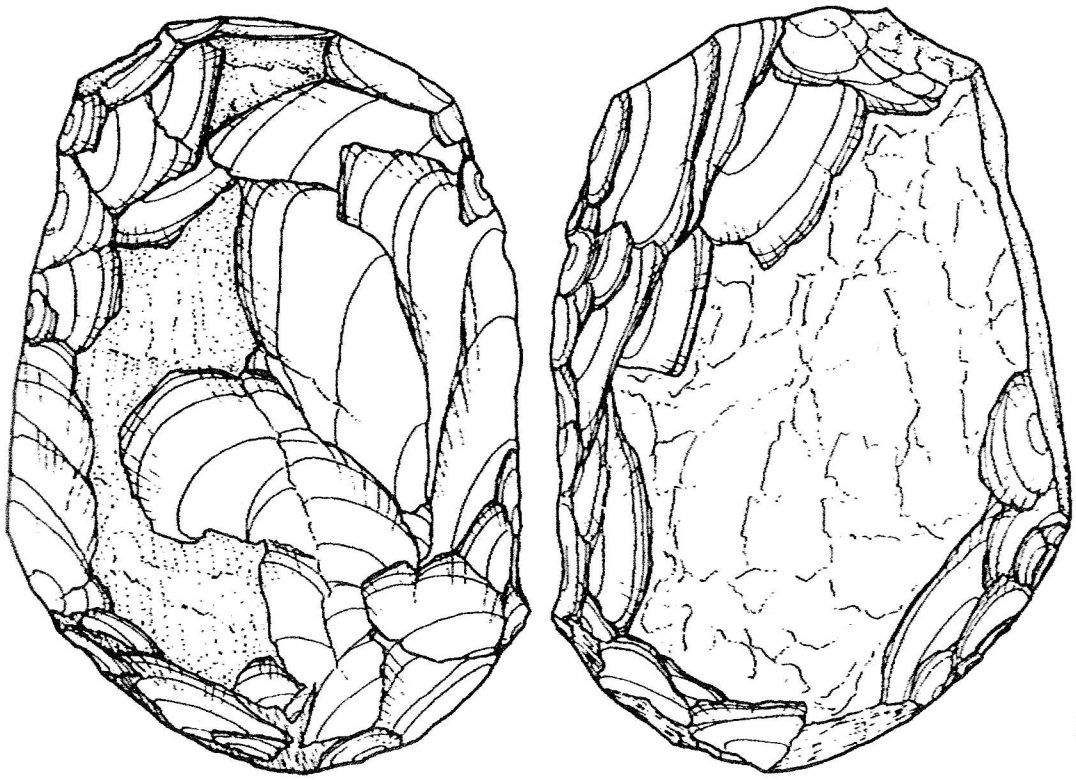
旧石器時代（アフリカ・ヨーロッパ）の石器の発展過程

(F. Bordes1968 *The Old Stone Age*)

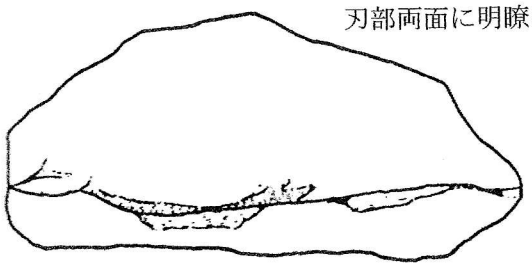


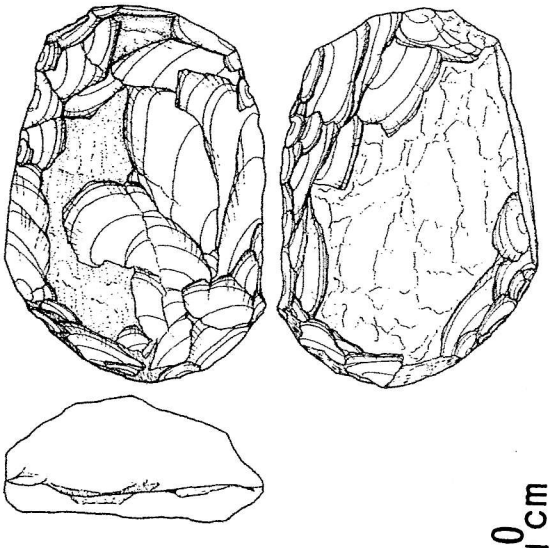
時代区分			人類	第四紀地質年代区分			実年代
鉄器時代			新人	完新世		後氷期	10,000
青銅器時代							
石器時代	新石器時代						
	中石器時代						
	旧石器時代	上部		更新世	後期	ウルム氷期	40,000
		中部	旧人				80,000
		下部	原人		中期	リス／ウルム間氷期 リス氷期 ミンデル／リス間氷期 ミンデル氷期	500,000
			猿人		前期	ギュンツ／ミンデル間氷期 ギュンツ氷期 ドナウ氷期	1,000,000 2,000,000

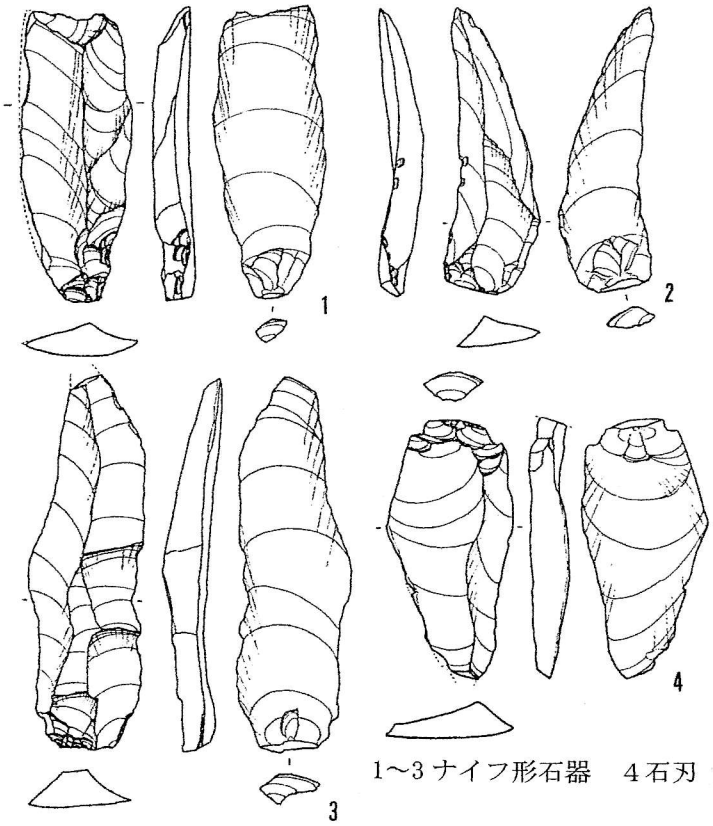
時代区分対応表



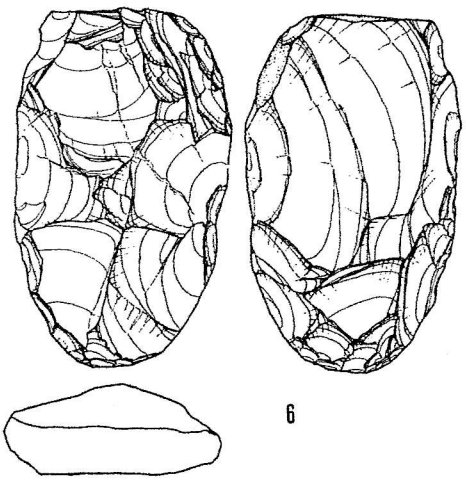
刃部両面に明瞭な研磨痕





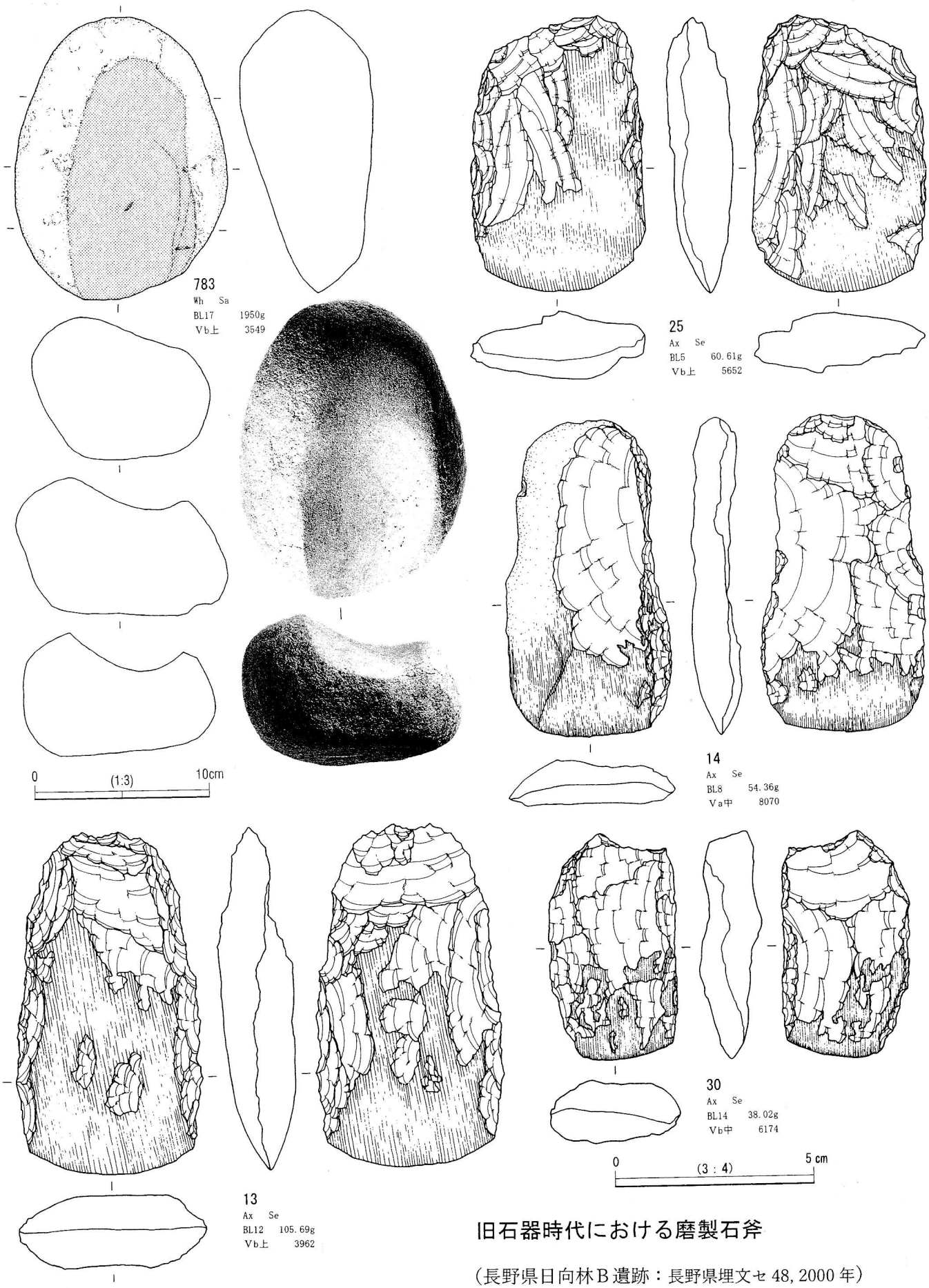


1～3 ナイフ形石器　4 石刃



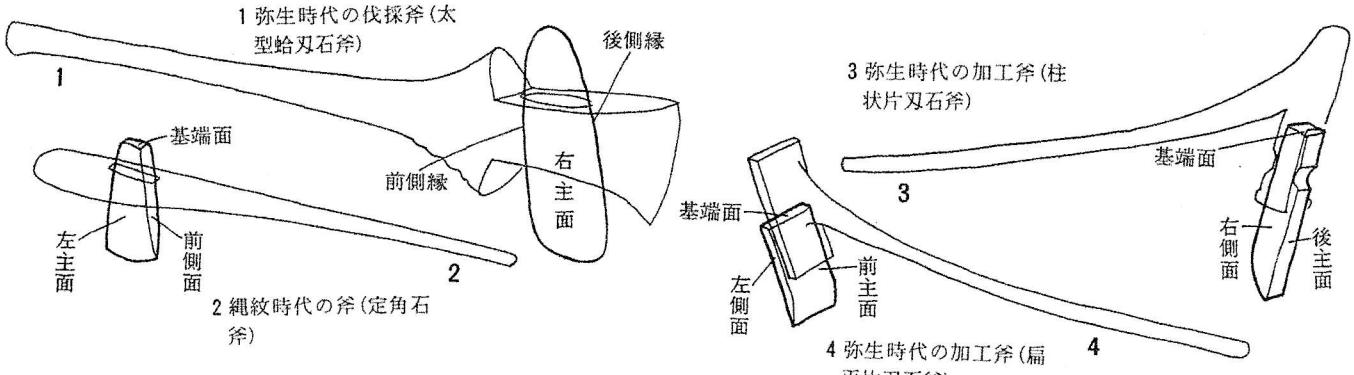
群馬県岩宿遺跡の「岩宿Ⅰ石器文化」の石斧（5・6）

（須藤隆司 1987「岩宿遺跡」『明治大学考古学博物館展示図録』）

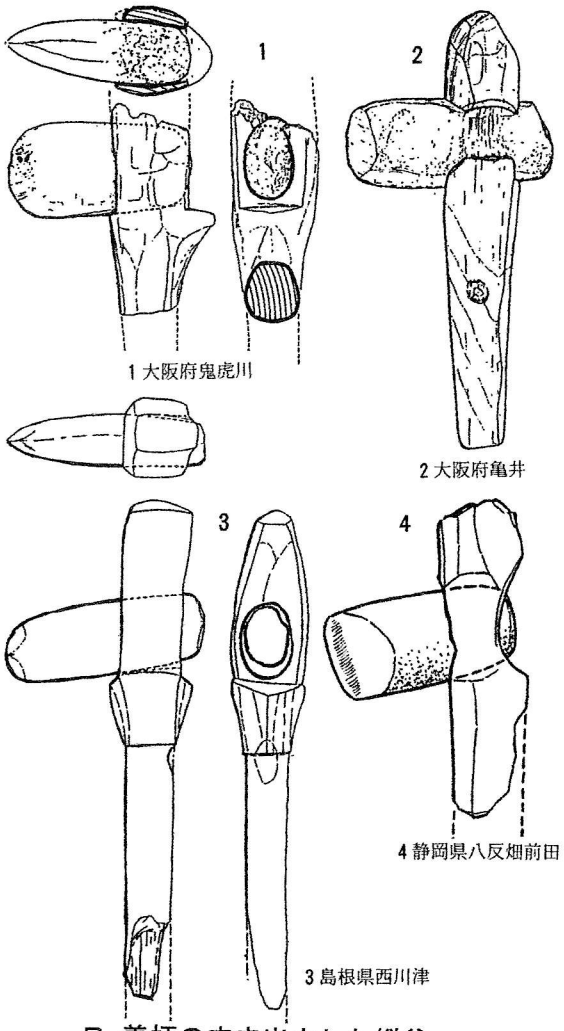


旧石器時代における磨製石斧

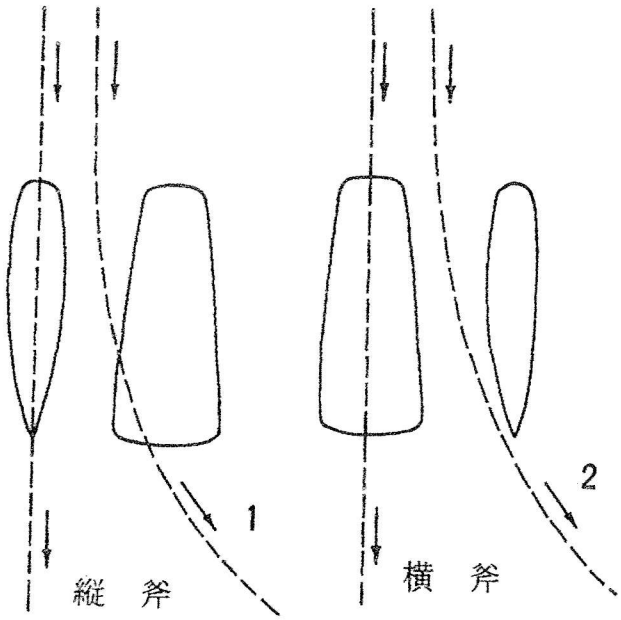
（長野県日向林Ｂ遺跡：長野県埋文セ 48, 2000 年）



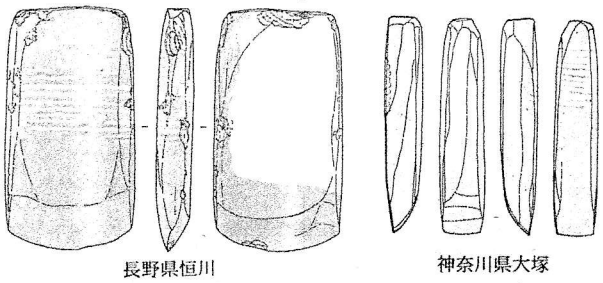
A 縦斧（左）と横斧（右）



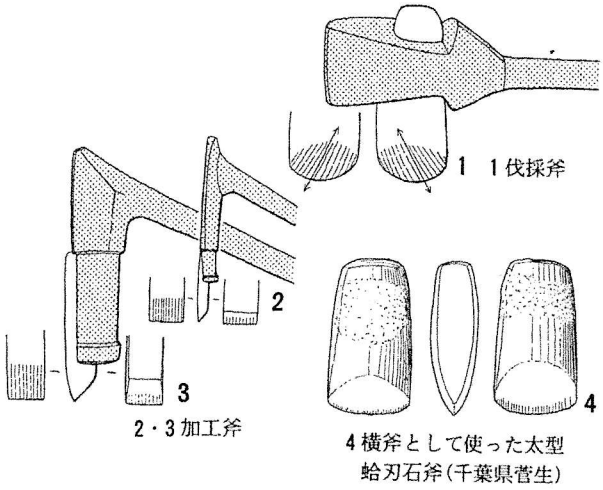
B 着柄のまま出土した縦斧



D 縦斧・横斧の使用時の動きと使用痕

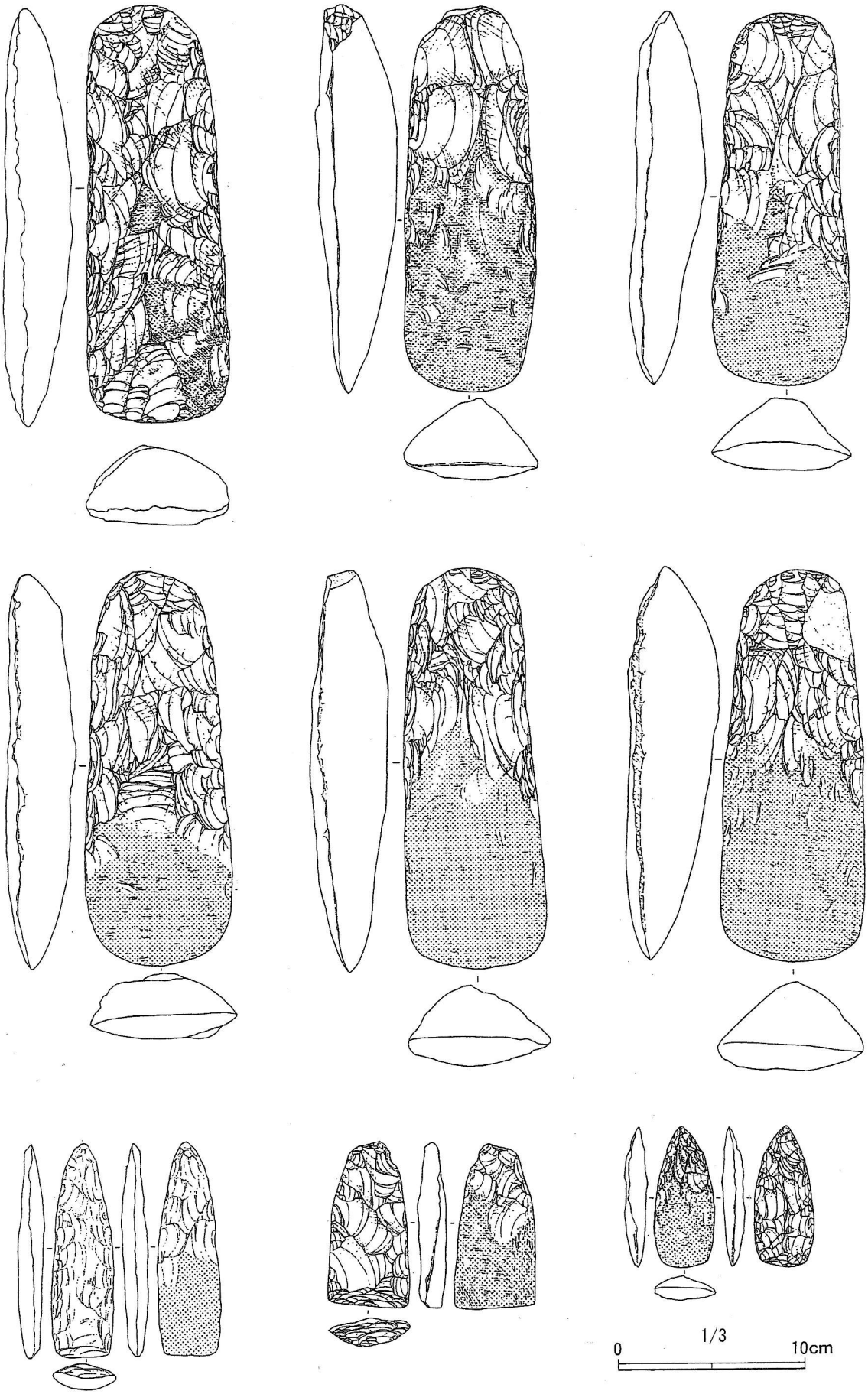


C 着柄のまま煤けて横斧と分かる例

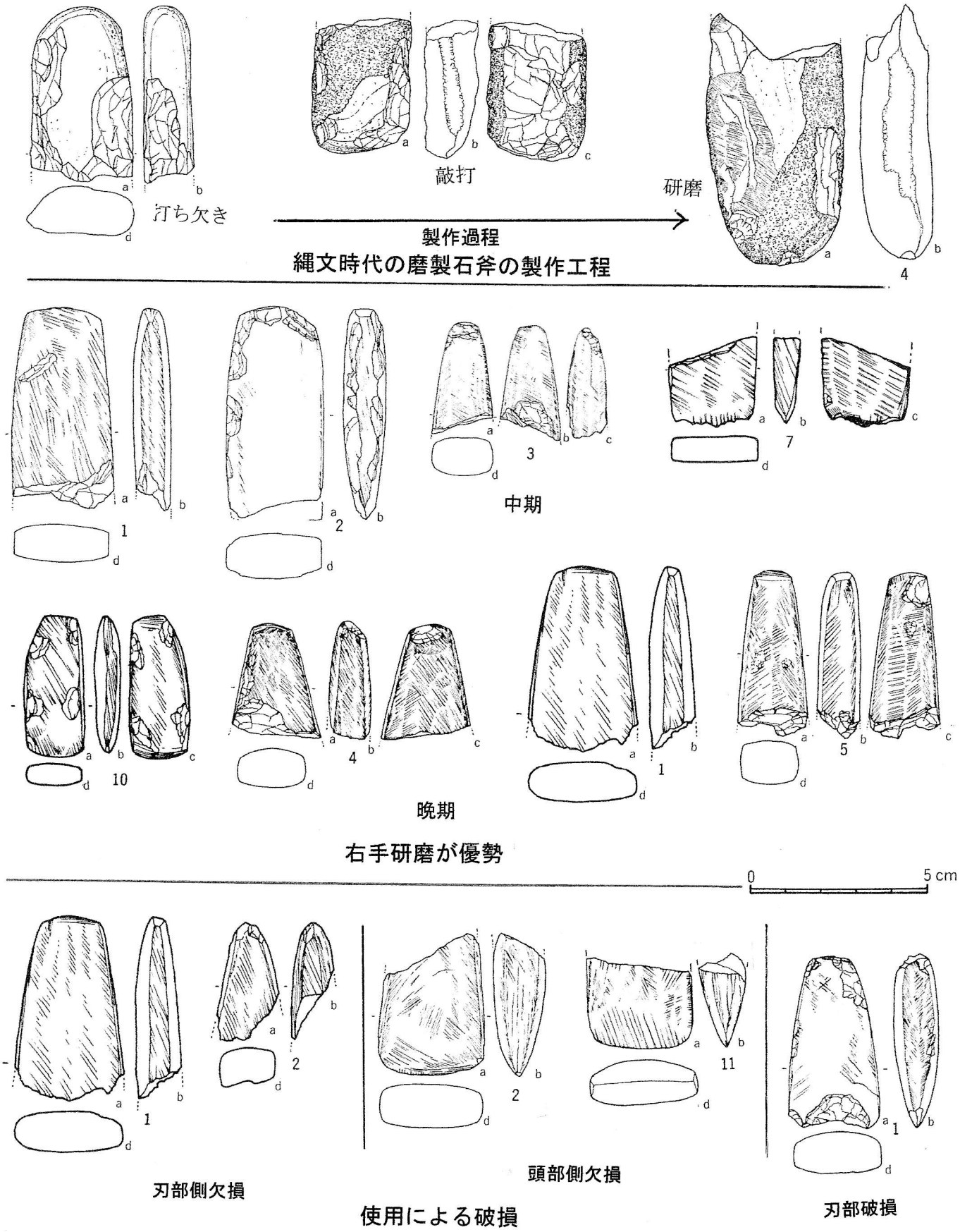


E 刃部使用痕による縦斧／横斧の判別

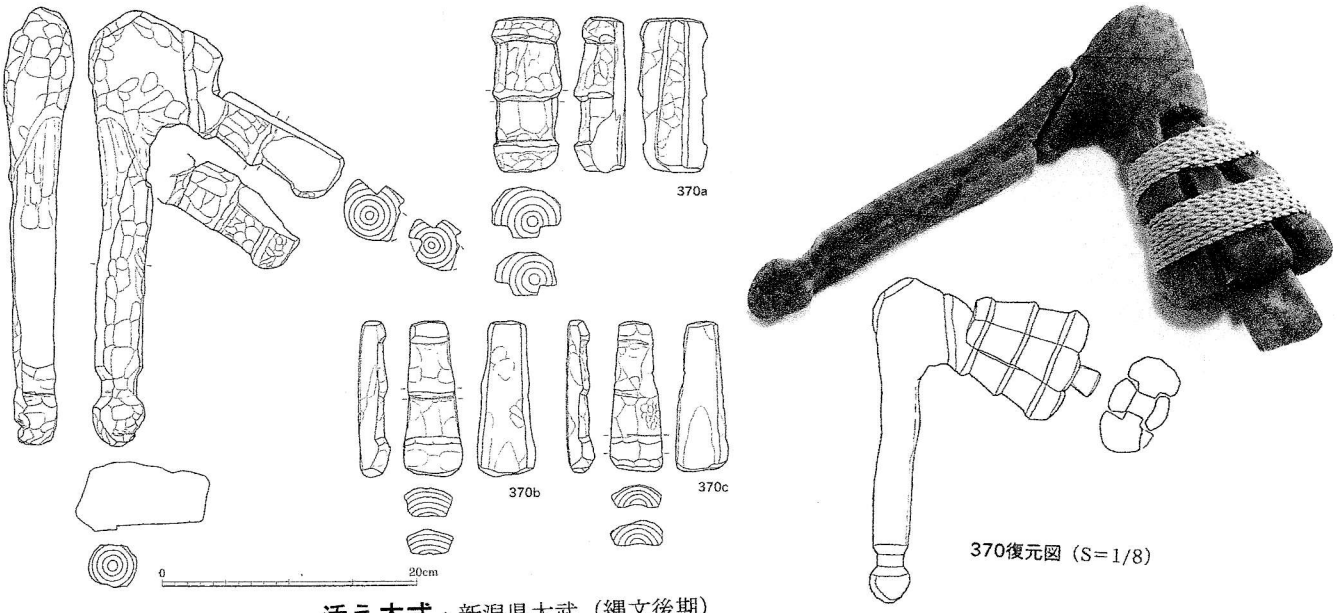
縦斧・横斧とその判別法　（佐原真 1994『斧の文化史』UP 考古学選書，東大出版会）



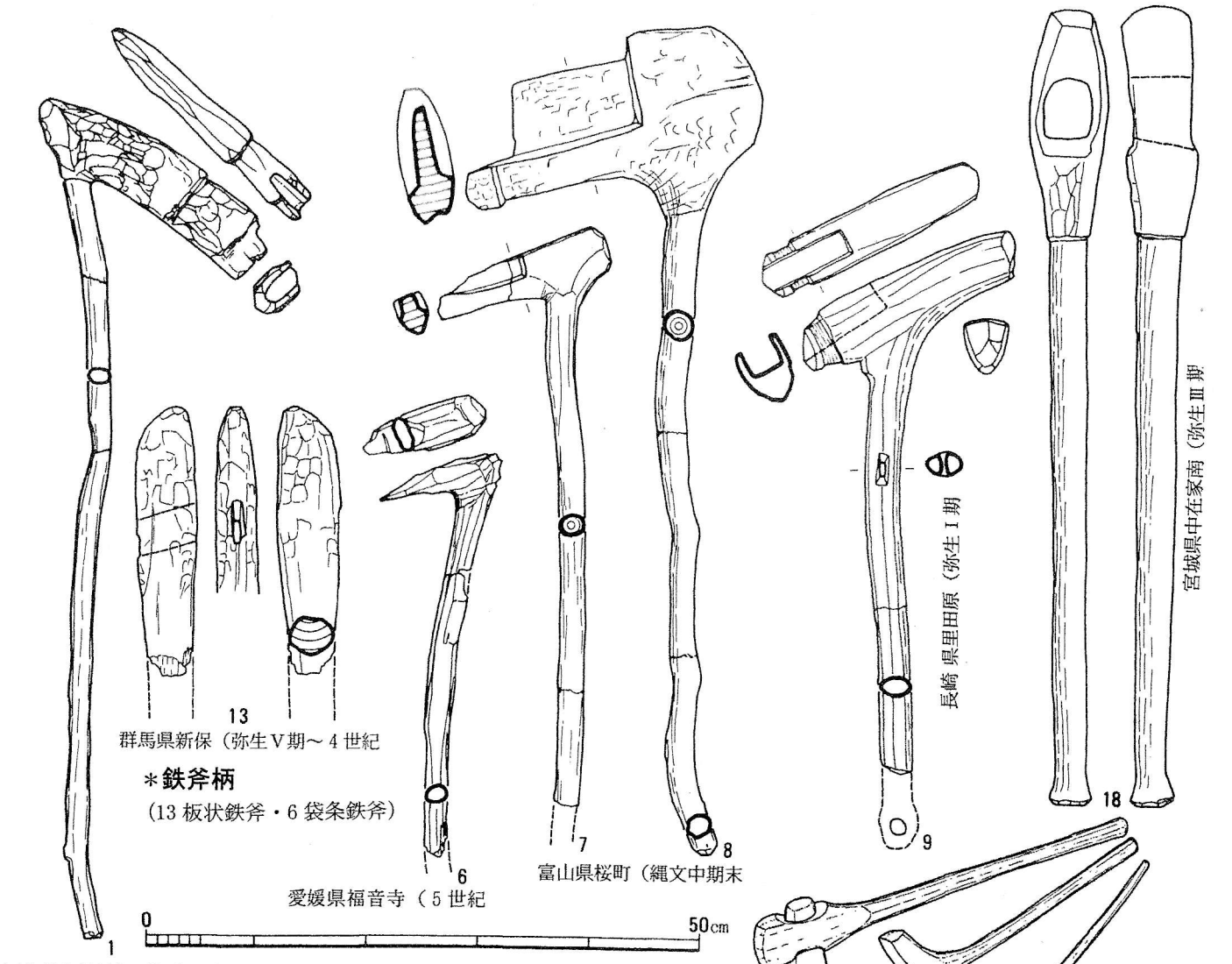
長野県 神子柴遺跡の局部磨製石斧　（林茂樹編　2008『神子柴』信毎書籍より転載）



縄文時代の磨製石斧の製作工程（上），右手研磨が優勢（中），使用による破損（下）
（阿部朝衛ほか 1987『寺地遺跡』新潟県青海町教育委員会）

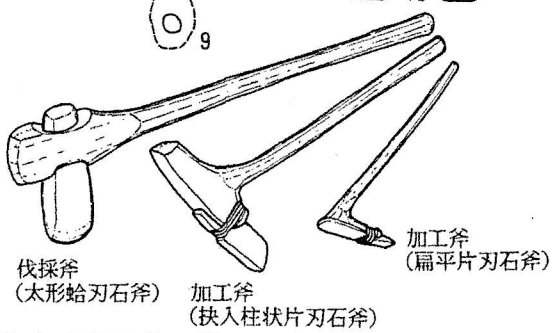


添え木式：新潟県大武（縄文後期）
（春日真実ほか 2014『大武遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会）

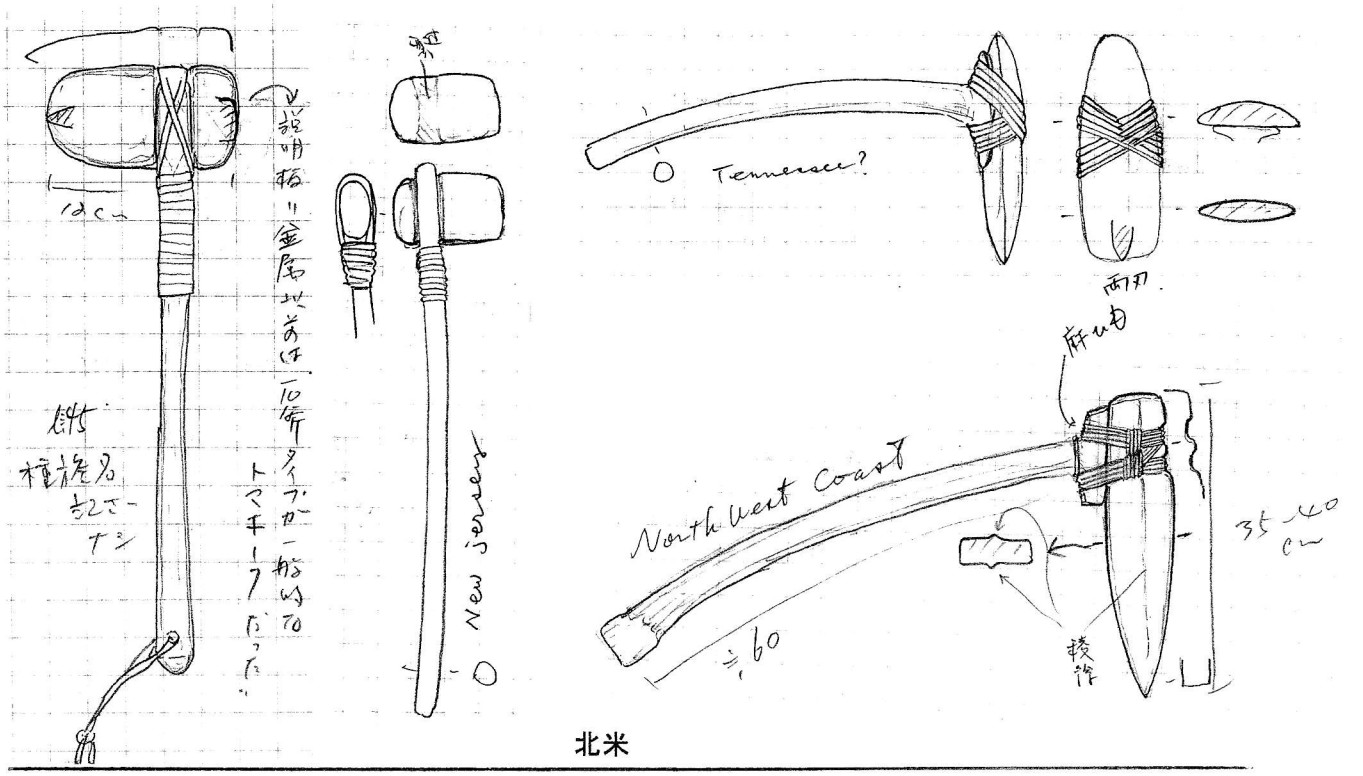


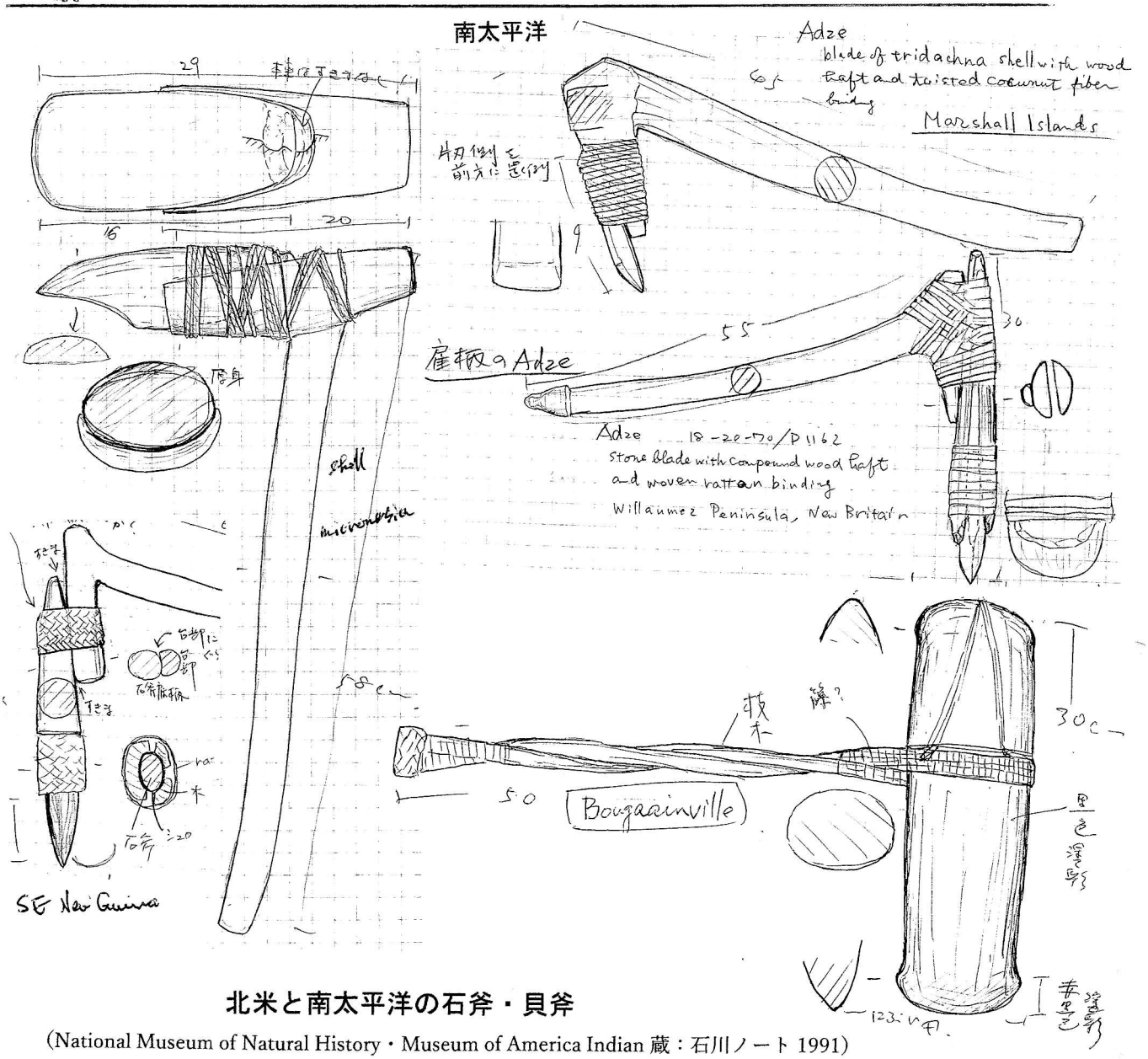
縄文・弥生時代の石斧柄

様々な斧柄
（上原真人 1993『木器集成図録近畿原始篇』奈良国立文化財研究所）



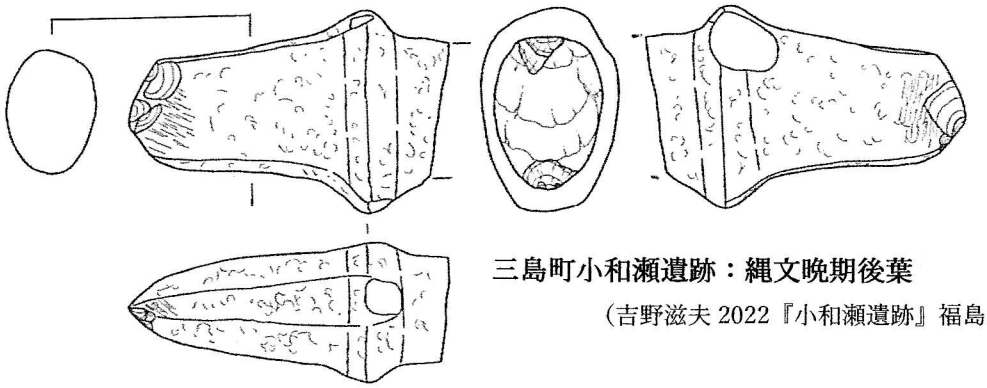
弥生時代石斧３種（1992『図解日本の人類遺跡』）





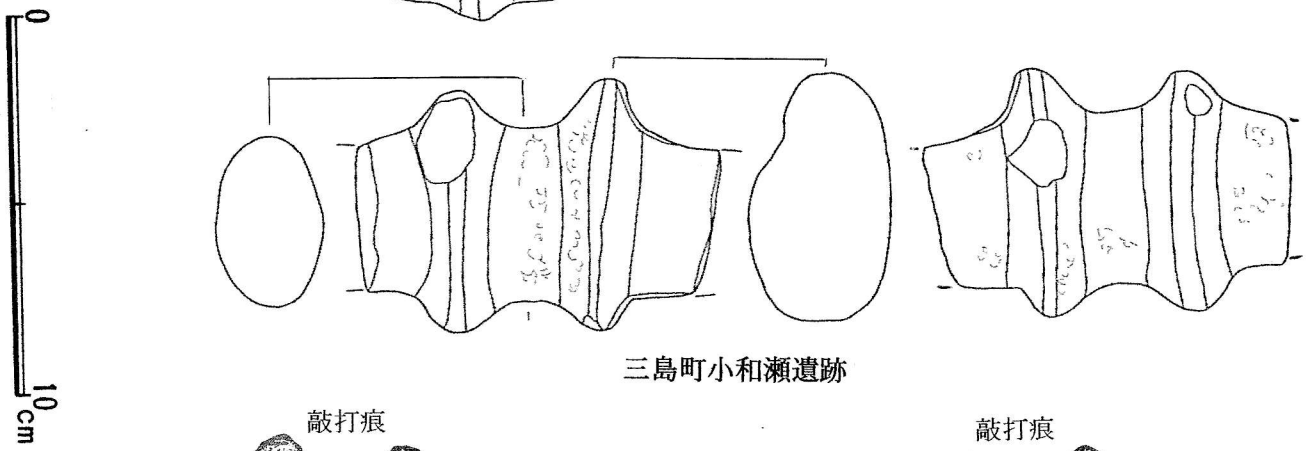
北米と南太平洋の石斧・貝斧

(National Museum of Natural History・Museum of America Indian 蔵：石川ノート 1991)

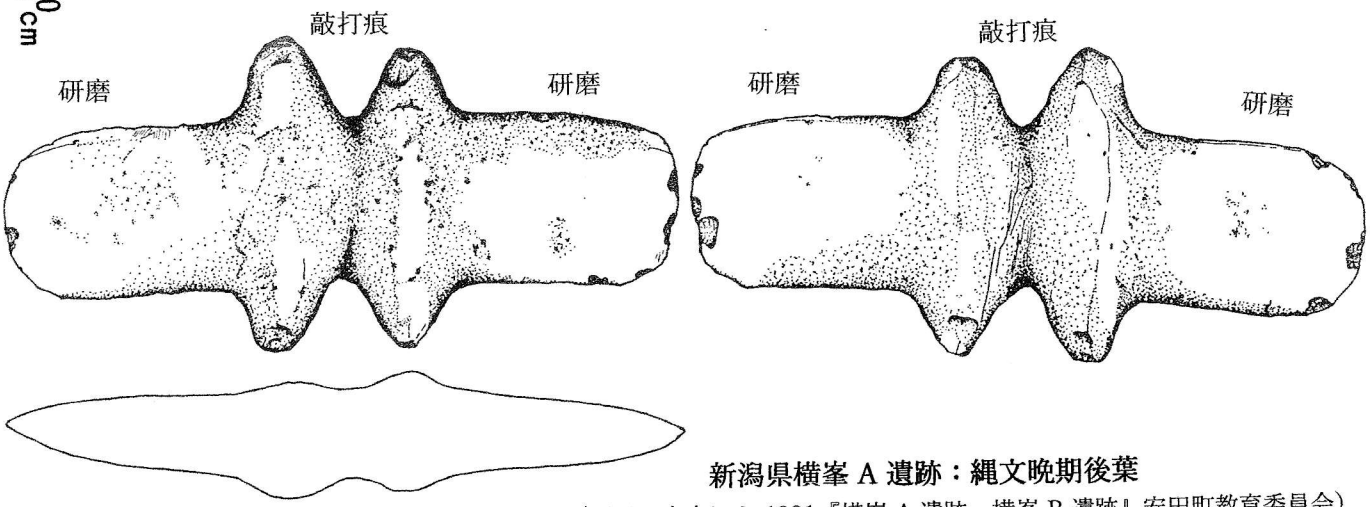


三島町小和瀬遺跡：縄文晩期後葉

（吉野滋夫 2022『小和瀬遺跡』福島県教育委員会）

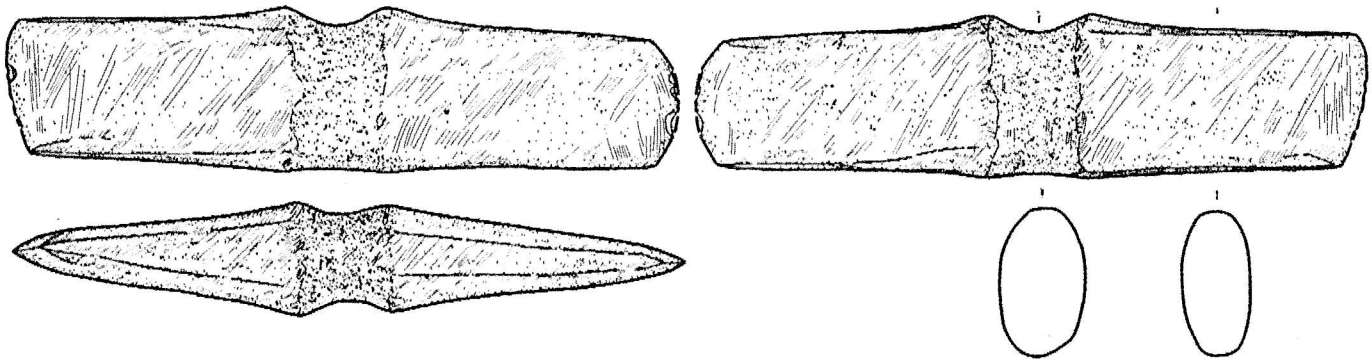


三島町小和瀬遺跡



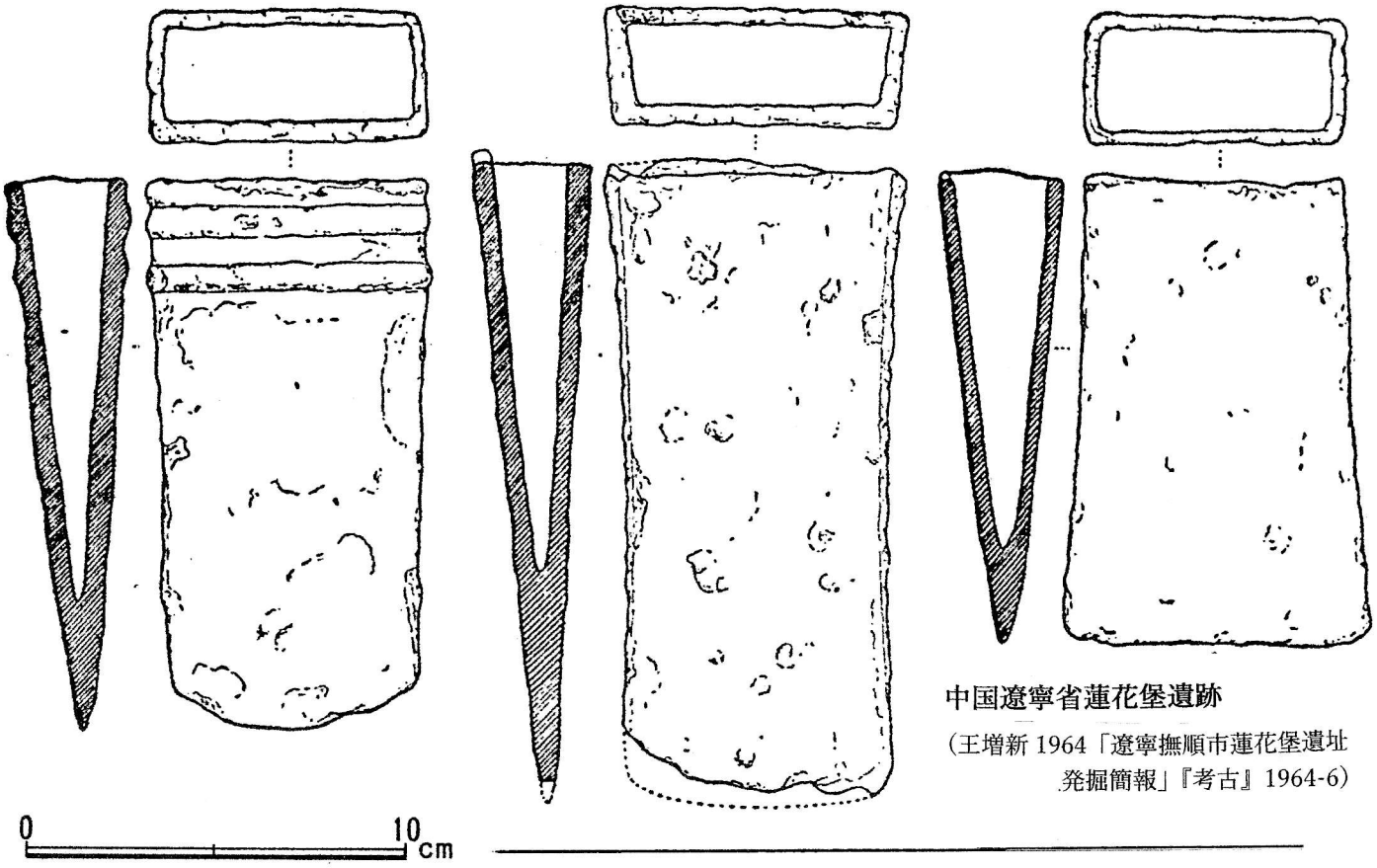
新潟県横峯 A 遺跡：縄文晩期後葉

（石川日出志ほか 1981『横峯 A 遺跡・横峯 B 遺跡』安田町教育委員会）



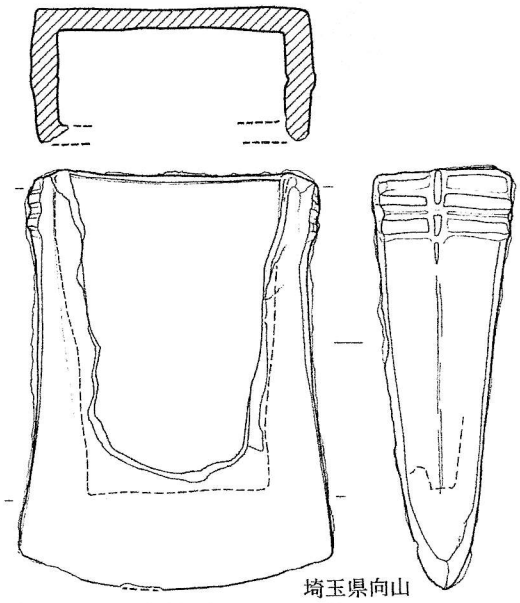
群馬県国衙下辻遺跡：弥生中期後葉（壁伸明 2010『国衙下辻遺跡』安中市教育委員会）

独鈷形の両頭石斧はどのように柄に装着したのか？

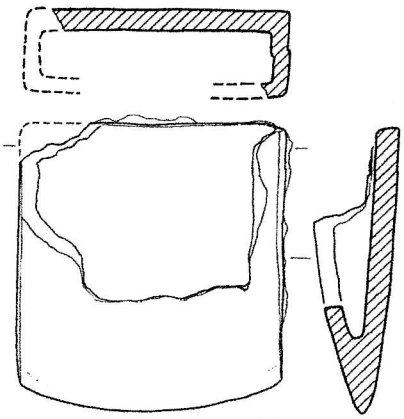


中国遼寧省蓮花堡遺跡

（王増新 1964「遼寧撫順市蓮花堡遺址発掘簡報」『考古』1964-6）



埼玉県向山



福岡県下稗田

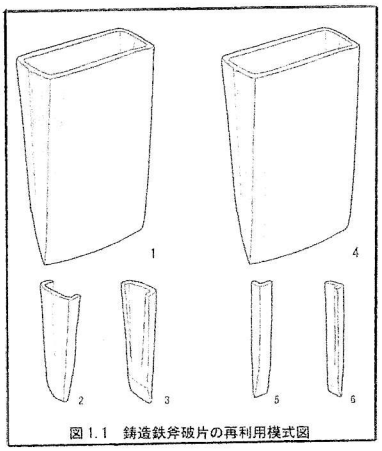
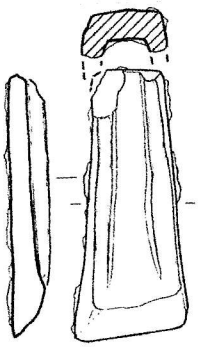
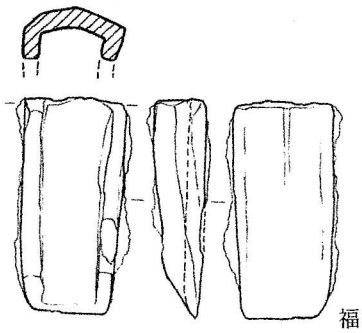


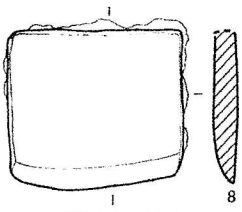
図 1.1　鋳造鉄斧破片の再利用模式図



福岡県中桑野

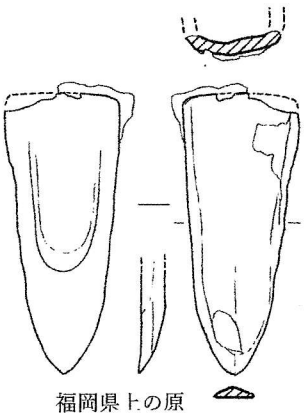


福岡県上の原



斧形

福岡県下稗田



福岡県上の原

鉇形

日本列島で発見された燕系統の鋳造鉄斧とその再加工品

（野島永 2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』科研費報告，広島大学）

中国・燕系統の鋳造鉄斧が弥生時代中期初め頃にもたらされる